

新冠百話

第九十一話

「新冠のおしん（創作）」

（要約文）

みぞれ降る秋の夕方、母と娘は重い荷を背負い、ポイントシカの湿原（現在の中央町と北星町）の細道を、家に向かって急いでいた。やがて渡り場に着くと、母親は幼い娘の震える手を引いて川を渡り始めた。危険だがこうするほか無いのだ。ようやく対岸にたどり着き体を拭いている時、娘が急に泣き出した。娘が握っていた黒砂糖の塊が溶けて無くなっていた。家から浜高江まで往復四里（十六キロ弱）冬支度の買い出しに同行し、やっと買い与えられた貴重なおやつだった。母親は娘を抱きしめることしかできなかった。

体が冷えると危険なため、二人は帰路を急いだ。沼のほとりを通り過ぎ、ウワトリの森（現在の高江）に入る頃はもう真つ暗だった。一軒の草小屋の前に差し掛かり、あたたかな灯りが漏れているのを見て「暖まってから帰るか」と母親は言った。娘は首を横に振り笑った。漏れ出た灯りの中に、差し出された娘の小さな掌があつた。そこには「こくわ」の実が二つ乗っていた。母親は目を見開いた。暗い森の中、しかも走りながら、娘は素早くこれを見つけていたのだ。さっきまで泣いていたのに、小さな体に宿る生き抜くための強さを見て、母親は胸がいっぱいになった。

いつしか風は止み、木々の隙間から月明りが帰路を照らした。元氣を取り戻して先を歩く娘を、母親は優しく見つめていた。数十年後、ウワトリの森に新しい掘立て小屋が建ち、一組の夫婦が住み始めた。周囲の桂の木々は太く、一日一本切るのが精いっぱい、夫婦の暮らしは厳しいものだ。小屋からは赤ん坊の声がしていた。この若い母親は、昔この森で二粒のこくわを採ったあの娘であつた。



現在のウワトリの森付近

～ 海・山・川 ルールを守って みな笑顔 ～ 事故が無く楽しいレジャーを過ごしましょう。

消防署新冠支署

戸 籍 の 窓

6月6日～7月5日までの届出分（敬称略）

●お誕生おめでとうございます

シン アユシュマン
SINGH AYUSHMAN

（NARPAT SINGH・GUDDI KANWAR）北星町

●おくやみ申し上げます

徳田	利勝	8 1 歳	節婦町
島	治義	7 7 歳	北星町
川端	晃弘	3 1 歳	東 川
壁岸	勇作	9 8 歳	東 川
飛渡	敬子	8 6 歳	朝 日
蜂屋	博子	8 7 歳	節婦町

●お問い合わせ先

町民生活課町民生活グループ住民係
☎ 0146・47・2112

町公式ホームページ 町公式フェイスブック



人の うごき

（令和8年6月末現在）

人 口	4,907 人	（前月比 △ 5 人）
男	2,515 人	（前月比 △ 4 人）
女	2,392 人	（前月比 △ 1 人）
世 帯	2,829 世帯	（前月比 △ 6 世帯）